

技わざの架橋 佐倉善七

佐倉善七は明治五年、京都府派遣リヨン伝習生である佐倉常七の弟である。常七のリヨン滞在中そして帰国して織工場教授人を勤める間、織屋としての佐倉家を支えていた。

この善七によってジャカードの紋織技法が桐生に伝えられているという事実は興味深い。

西陣に次いでジャカードを導入したのは桐生である。明治十年、森山芳平ら三名が共同で一機、そして明治十三年、佐羽安平、高橋幸七が三機いずれも荒木製ジャカードを購入している。

佐倉善七は明治十三年、招かれて桐生を訪れ同地の機業家に紋織技法を指導している。その結果、同産地では群馬県庁の御用品としてテーブルかけを製織することができたとい

う。『桐生

織物史』

によれば、

「この卓

子掛は一

間四方ぐ

らいの大

きさで白

茶の琥珀

織に群馬

県に因ん

で三寸位なる馬の散らし模様を織出した」とある。

それにしても江戸時代の後期から始まる西陣と桐生の市場抗争の歴史を観るとき、これは画期的な出来事であろうと思われる。産地同士の技術交流の端緒を開かれたといってもよい。

佐倉常七、荒木小兵衛と桐生の森山芳平は親交が深く、おそらく桐生では荒木製ジャカードを購入したが、使用法が解らず、佐倉常七に指導を依頼したものと情勢判断される。

常七のもとには当時、岡山からも指導依頼があった。花菴の製織にジャカードを応用するという。彼は岡山に向かい、桐生へは弟の善七を行かせている。織殿教授人として京都府に雇われている身であったので、公に絹織物の指導に他府県に出向くことはできなかったのだろう。

善七の指導後、桐生では機織の改良は進み米国から紋彫機ピアノマシンを輸入、国産化にも成功して、西陣にも持たたらされている。

明治中期から西陣、桐生ともに織物の産地としてともに大きく飛躍するが、佐倉善七は両産地の技術交流の道をひらいた一人である。

(福本武久)

